

# 概念体の構造 (3)

—— 経済哲学のための構想 ——

浦 上 博 達

私たちの 19 世紀を特徴づけるのは、科学の勝利ではなく、科学に対する科学的方法の勝利である。  
ニーチェ『権力への意志』より<sup>(1)</sup>

## 目 次

### 第 I 章 予備的考察

#### 第 1 節 認識の「性質」問題

#### 第 2 節 概念体の構造

1. 概念体の三層構造
2. 相互作用 (以上, 第 18 号)

### 第 II 章 三つの概念世界

#### 第 1 節 意義の世界

1. 「意義」について
2. 形而上概念とは (以上, 第 19 号<sup>(2)</sup>)
3. 形而上概念の要請
4. 形而上概念の役割
5. 共同体紐帯概念としての形而上概念 (以上, 本号)

#### 第 2 節 論理の世界

#### 第 3 節 経験の世界

### 第 III 章 三つの概念世界の相互作用

#### 第 1 節 意義の世界から

#### 第 2 節 論理の世界から

#### 第 3 節 経験の世界から

【権力への意志<sup>(3)</sup>】 形而上概念が生動的意志自我の意志作用に基づいて生成された概念であるということには二面性があるが、しかしどちらの面も生動的意志自我の権力への現われであることについては、同質である。そのひとつの面は、対自という内的なものであり、自己そのものを正当化するために自己の生に向かう権力の行使である<sup>(4)</sup>。つまり、生そのものが権力なのである。いまひとつの面は、対他という外的なものである。それは自己を取り巻くすべてのものを認識的に自己の支配下に置こうとすることである。このことは神話の時代、宗教の時代、科学の時代を問わず人間が求める生の根源的な欲求である。そしてそのなかに他の意志を、つまり他者の生を自己の生の支配下におこうとする権力が含まれる<sup>(5)</sup>。こうして生動的意志自我が認識的に概念構成した形而上概念は、精神的な権力への意志の武器<sup>(6)</sup>となるのである。それというのも、形而上概念

は、生的自我意志の生の肯定という欲求を充たすために生成されたものであるがゆえに、その生成からしてすでに権力的な性格を有しているからである。したがって形而上概念は、経験的・論理的には把握できず、生的自我意志の作用として意義的に理解されるのみである。

【形而上概念の実在性】 生的自我意志が自己を保存しその権力を伸長させるためには、それが支配しうる実在性の構想のうちに普遍的妥当性なるものをとらえていなければならない。そしてこの普遍的妥当性なるものに基づいて自己のとする価値評価の態度つまり価値の範型が構成される<sup>(7)</sup>。そこで普遍的妥当性という性質を有した価値の範型は、その普遍的妥当性という性質に基づき実在性を主張し始める。そして他の概念（論理概念・経験概念）もこの範型のなかに取り込まれることによって価値の範型の実在性の存在証明に用いられると同時に、今度は逆にそれらの概念が価値の範型の実在性から存在証明を与えられるのである。こうして概念同士が互いに支え合ってその概念体全体の実在性が主張されることになり<sup>(8)</sup>、このとき生的自我意志は、己の概念体の実在化を謀ることによって自己の実在化をも決定的に達成するのである<sup>(9)</sup>。また概念的成層としては、形而上概念は概念体の実在性の主張の礎石としても概念体の中座を占めることになるのである。

### 3. 形而上概念の要請

【研究の方向は本質的認識によって決まる】 いかなる研究分野においてもやみくもに研究活動がなされているわけではなく、研究に着手するさいには研究の方向性が必要とされる。研究の方向性は、言葉を換えると認識関心の方向性でもある<sup>(10)</sup>。研究の素材は事象<sup>(11)</sup>において存在しているとしてもその方向性は事象それ自体に付着しているのではなく、われわれの認識関心の方向性によって決定されるのである<sup>(12)</sup>。では、そのような認識の関心はどのようにして決定されるのだろうか。認識関心とは、「何が、知るに値するか」ということであり、論理的には、それによって「何を認識したいか」という認識の目標が設定される。この「知るに値する」ということが「本質的認識」という言葉の意味である。この本質的認識は、個人的性向、教育、社会的雰囲気、環境、制度、通念・伝統、突発的な出来事などのさまざまな要因によって形成されるが<sup>(13)</sup>、それらを総合して文化意義とよぶならば、認識主体の有する文化意義によって本質的認識は決定されるのである<sup>(14)</sup>。つまり研究の方向は、研究対象とされる事象それ自体にいわゆる「客観的」に付着しているのではなく、われわれが本質的認識をどのように設定するかによって認識関心の方向づけがなされるのである<sup>(15)</sup>。

【本質的認識は、形而上概念として体现される】 本質的認識としての文化意義は、われわれ自身がわれわれの生存を価値ありと肯定する価値理念であり、それは、生存においては経験的な妥当性を有している<sup>(16)</sup>が、価値理念して表明されたときには超経験的な妥当性を主張することになる<sup>(17)</sup>。こうして文化意義は、われわれ自身の生存の意味が根ざすとされる究極かつ最高の価値

理念として、それゆえ超経験的な妥当性を有している本質的認識として形而上概念に体現化される。こうした形而上概念は、なにものかとして有意味的に主題化されうるかぎりでは、必ずや既にある文化のなかで文化の働きによって「立てられたもの」あるいは「指定されたもの」なのであり<sup>(18)</sup>、文化こそが形而上概念の別様のあり方なのである<sup>(19)</sup>。このように考えると、「文化」を「(自然)科学」と対比することは誤りであり<sup>(20)</sup>、「(自然)科学」のさまざまな概念体にも、文化は形而上概念としてそれぞれの概念体の中核に滲み込んでいるのである。それというのも、人間は意味(意義)に生きる存在であり、そのため生は、意味(意義)を欲しつつけるのであり、その点では研究者の生も例外ではないからである<sup>(21)</sup>。

【形而上概念は、概念体の統一化のために要請される】 認識上の連関づけは、概念の連関づけによって果たされ、その方向性が研究の方向である。科学的研究とは、統一概念に基づく事象の連関づけの体系であるが、それは、認識とは独立した事象の即自的な連関ではなく、認識上の連関なのであり<sup>(22)</sup>、概念の体系化なのである。概念体があるひとまとまりの体系として存在するためには、その体系を纏め上げるある一組の統一概念が必要であり、それが研究の方向性を決定しているのである。ここにこそ文化意義という価値的色彩を帯びた形而上概念が要請される第一義的な理由がある。あるひとまとまりの概念体がひとまとまりの価値あるものとして意義をもつためには、その概念体に統一的な価値を与える概念が必要であり、それを指揮する概念は、その概念体を、その概念体が意義あるものとなるような方向に纏め上げる概念でなくてはならない。ある概念が価値を担うには「生の肯定」に根ざした文化意義を反映したものであることが必要である。それというのも、「生の肯定」のもとで承認を受けた認識こそが本質的認識とよばれ、そしてその内実は文化意義なのであるから。こうして概念体の意義の世界である形而上概念層(一組の統一概念)が研究の方向を決め、研究の錦旗として掲げられることになるのである。

#### 4. 形而上概念の役割

【形而上概念の役割】 認識とは、そもそも人間が生を肯定的に全うしようとすることから生じる。認識活動はそのような意味で、生の活動である。生の活動としての認識が概念体として表現されるさいには、その概念体に「生の肯定」を有している概念が必要とされ、しかもそのような概念がその概念体の中座を占めることになる<sup>(23)</sup>。このような役割は、普遍的妥当性を有する概念によって遂行され、それは価値評価的性格を装っているのである<sup>(24)</sup>。そしてこのような役割は、形而上概念によってのみ果たされる。例えば形而上概念を有さない経験概念のみから構成されている概念体、あるいは論理概念のみで構成されている概念体、またその二者のみから構成されている概念体は、それぞれの意味で客観的な認識とみなされてはいるが<sup>(25)</sup>、意義を有した認識の概念体としては成立しない。なぜならば、意義ある概念体は、価値評価<sup>(26)</sup>と普遍性を必要とするからである。それでもなお、それらの概念体に「価値がある」というならば、それらの概念体を

構築した者のうちにすでに先入見としてある形而上概念が抱かれているのである。

【形而上概念は「生の肯定」というレベルでの「もっともらしさ」によって形成される】 認識目標に達する体系化の作業において重視されるのは、認識目標の主観性を客観化の装いに高める手続きであり、その装いの過程は、「もっともらしさ (plausibility)」あるいは「説得的である」ということである<sup>(27)</sup>。そしてこの「もっともらしさ」は認識客体の側で生じる営為ではなく、すべて認識主体の側で生じる営為なのである。なぜならば、その「もっともらしさ」あるいは「説得的である」は、生の意志に訴えることであるから。つまり、「もっともらしさ」あるいは「説得的である」ということは、自己のあるいは他者の「生の肯定」において同意をうることなのである。

【「何を知るに値するか」を決定するのは、形而上概念である】 研究の意義とは、「知るに値する」ことを知る（本質的認識）ということである。とすればこの本質的認識の意義は、素材からは決定されない。なぜならば、研究者は、かれが素材と取り組むさいに、すでに無意識に価値理念を抱いており、これにより無限の事象のなかから、ごく僅かな一部分をまえもって取り出したうえで、もっぱらその考察だけを、自分にとって研究するに値する問題であるとしているのであるからである。そして何がわれわれにとって研究に値する意義をもつかは、当然のことながら経験的に与えられたものを価値的に無前提に研究することからは推論されえず、むしろ、そうした意義を確定することこそ、なにものかが研究の対象となるための前提をなすのである<sup>(28)</sup>。そしてこの意義の確定こそがこの意義の世界においておこなわれるのである<sup>(29)</sup>。意義は、一見して、研究の結果からも取り出したり、基礎づけたり、理解することもできるが、そうした意義もやはり最終的には無前提の価値理念に関係づけられることになるのである。無限の経験的実在は、価値理念に関係づけられた部分のみが文化として概念化され、意義あるものとなる。つまり認識の概念体とは、無限の事象のなかからほんのわずかな部分のみが、形而上概念に反映されたわれわれの関心によって色彩づけられ、そのみが、われわれにとって意義をもつ研究対象となるのである<sup>(30)</sup>。それが意義をもつというのは、価値理念と結合した一部の概念が、われわれの意志に対して決定的な関係を提示するからである。その決定的な関係とは、その概念が「生の肯定」という糸によってわれわれの意志と結ばれていることである<sup>(31)</sup>。それゆえに、またそのかぎりにおいて、その部分のみが、形而上概念の特性においてわれわれにとって「知るに値するもの」つまり本質的認識として特定化されるのである。

【認識の対象は形而上概念の命令によって選択される】 本質的認識は形而上概念に体现され、その形而上概念によって研究対象は選択されるため、研究一般は必然的に形而上的な前提を有している<sup>(32)</sup>。しかし、だからといって研究の経過がまったく形而上学的であるかといえばそうでもない<sup>(33)</sup>。それは、概念の相互作用を述べるさいにとりあげることになるが、概念体を形成する他の概念（論理概念・経験概念）がその形而上的専制を抑制するからである<sup>(34)</sup>。

## 5. 共同体紐帯概念としての形而上概念

【認識における共同体】 ここまでは概念体一般についての考察であったが、いまは概念体の存在する様態を明らかにする段階に至った。具体的な概念体は、いつも、唯一、存在するのではなく、むしろ異時間的にはもちろん同時的にも複数存在するのが常態である。本論文の分析は、この事実、つまり過去においても概念体は複数存在してきたし、また現在でも複数存在することを前提にして遂行されている。そしてこれらの種々の概念体は、学派としてそれぞれの学的共同体を形成しているのである。学派の存在は、経済学に限らず<sup>(35)</sup> いかなる学問分野でも認められる。本論文の出発点（「先入見」）は、ここにある。つまり、なぜに、同一の研究対象（同じような研究領域<sup>(36)</sup>）を取り扱いながらも様々な学派つまり多様な認識が存在するのであろうか。その事実を認めるならば、その多様性はどのような事柄に基づいて生じることなのであろうか。その多様性は、認識対象側で生じているのであろうか、それとも認識主体側で生じているのであろうか。それについて本論文は、認識主体側における概念体の形成過程からこうした多様性が生じることが説明しようとしているのである。つまり概念体の中核が形而上概念によって形成されていることが認められるならば、学派の存在は論理的にも必然的なことである。それというのも、形而上概念の概念体における役割からして、形而上概念の内容が異なればそれに応じて概念体の様相が異なり、それに従って学派が誕生することは必然的な帰結であるからである。そして認識の共同体である学派が誕生し、形成され、維持され、その版図を拡大する<sup>(37)</sup> 過程で形而上概念が大きな役割を果たしているのである<sup>(38)</sup>。

【「共同体の生の意志」の発生】 もともと共同体は個人の生の意志の発現形態の一種である。それというのも、個人の生の意志は、権力への意志を有しており、その権力への意志は権力の行使の手段としてもその目的としても共同体を求めるからである。こうして、元来、共同体は個人の意志によって形成されるが、しかしながら共同体がいったん形成された暁にはこの関係は逆転する。それというのも、共同体は個々の集まりであるが、その個々が相互に他の個を牽制し始めるとそのような個々の意志をヒエラルキー的に統制する別の意志が要請されることになるからである。この別の意志は、共同体を紐帯する意志として存在しはじめる。ここに個々の意志とは異なる「共同体の生の意志」<sup>(通記)</sup>が発生する。それが生の意志であるのは、共同体それ自体が生の機能を有するからである。個々の生の意志は、むしろその共同体の生の意志に沿うことによって個の生の意志を発現しようとさえする。このようにして個々人の意志とは乖離した共同体の生の意志が発生し、それは個の生の意志から独立に、二様な面において価値性を有する「共同体の生の意志」として生長することになるのである。

【紐帯概念は、二様な面で価値性を帯びることによって形而上概念となる。】 認識的な「共同体の生の意志」には、共同体を紐帯する認識的な概念が必要とされる。それを共同体の紐帯概

念<sup>(39)</sup>とよぶならば、それは共有される本質的認識であり、それが失われるとその共同体が崩壊するような概念である<sup>(40)</sup>。この紐帯概念は、その共同体内において（その意味では限定的な）なんらかの普遍性を有しているものとみなされている。というのも、そうでなければ共同体の共通性を形成および維持できないからである。言葉を換えれば、共同体はその形成・維持のためなんらかの共同主観を必要としている<sup>(41)</sup>。しかしこの共同主観ということだけでは紐帯概念が価値をもつということにはならない。それはすでに個の生の肯定から独立した共同体の生の意志による二様な作用から価値性を帯びてくるのである。その二様性とは、共同体の保全と伸張という二面においてみられるのである。

まず、共同体はそれ自身の保全を図ろうとする。そしてこの保全すること自体がすでに価値となるのである<sup>(42)</sup>。ここで共同体の紐帯概念は共同体の保全を限界的に担っており、この紐帯概念が共同体の保全に対する脅威に抗する防御の役割を果たす。そしてそれは、「この概念体を、認識的に価値あるものと考えているのか、それともその価値を認めていないのか。」ということであり、言葉を換えれば、認識的共同体の構成員に対して「あなたは仲間なのか、そうでないのか。」を迫るものなのである。こうして紐帯概念は、（共同体内という範囲での限定的ではあるが）普遍性と価値を帯びることになり形而上化する。

さらに共同体の生の意志から発生する権力への意志は、己の保全だけに満足せずその版図を広げる欲望に駆られる。価値と普遍性をおびた紐帯概念は、ここに共同体の外部へと向かうことになり、そのためにも、共同体のみの限定的な価値および普遍性を超えた価値および普遍性の一般化を主張するようになる。というのも、その勢力拡大の行進は、普遍性を謳い、その価値を承認させるという錦旗のもとでおこなわれるからである。こうして概念体の紐帯概念は価値と普遍性を有し、その役割は、価値と普遍性をその本質とする形而上概念が担うことになるのである。

#### 〈注〉

(1) [9] 〈466〉(下) p. 13

(2) 但し、最後の2つの小見出しは本号に含まれる。

(3) この表現はニーチェ (F. Nietzsche) からのものである。「権力への意志」についての明確な定義はニーチェには見出しえないが、生を権力への意志とみなし、権力への意志とは、生が絶えず強大になろうとする生長過程である、と解される。例えば、「生とは権力への意志である」([9] 〈254〉(上) p. 222), 「一生そのものが権力への意志なのだ。」([8] 〈13〉 p. 33), とニーチェは言い放つ。本論文において用いられる「権力への意志」とは、他者の生の支配を目指す意志である。

(4) ニーチェは、自己保存の衝動と権力への意志について、自らの力の発現としての権力への意志をより根本的なものとみなす。すなわち、「生理学者らは、自己保存衝動を生物の根本衝動とみなすことについては、とくと考え直すべきである。およそ生あるものは、何はおいてまず、自らの力を発現しようと欲するものだ、一生そのものが権力への意志なのだ。自己保存は、その間接的な極く通例の結果にすぎない。一要するに、どこでもと同様にここでも、余計な目的論的原理が入り込まないよう用心しなければならぬ！—自己保存衝動というのも、そうした類いの原理なのだ(略)。」([8] 〈13〉 p. 33) 本論文は、ニーチェの警告にも拘らず自己保存が権力への意志の衝動となっていると考えて



いる。

- (5) ディルタイ (W. Dilthey) は、生を根底にもつ、多様な世界観の争いについて次のように述べる。「地上は無数の型の生物で被はれてをり、これら生物の間には生存と繁殖の余地とを求めて不断の競争が行はれてゐるが、同様に人間社会に於いても世界観の諸形態が生じて、精神を支配する権力を獲ようと相互に闘つてゐるのである。」([5] p. 24) ディルタイの考えにはまさしくニーチェの警告する「余計な目的原理」が含まれているが、本論文も、解釈として（おそらく事実は永久に謎であろう）ディルタイの立場に立つ。

また、経済学界におけるヒエラルキーの存在について、レオンティエフ (W. Leontief) は次のように述べる。「今やアカデミックな経済学は、安定的で停滞した平衡状態、そして華麗なる孤立状態に陥っている。(略) そのような状態は、有力な経済学部<sup>1</sup>の終身在職権を持った教師が、若年教師の要請、人事そして研究活動を厳しくコントロールし、また同僚同士の評価という形で、年長教師についても同様にコントロールしているかぎり、続くように思われる。この国の最も影響力のある経済学部で、知的規律を維持するために採られている方法は、[初年兵教育のアメリカ] パリス島で規律を維持するために海兵隊が採用した方法を時として連想させるのである。」([16] p. xi 訳書 p. 5) さらに詳しくは、カンタベリー (E. R. Canterbury) = バークハート (R. J. Burkhardt) の論文「経済学は科学か、という問いは何を意味するのか」([16] pp. 22-40 訳書 pp. 29-635) を見よ。この論文は、現代の経済学界における集団行動における仲間意識が存在し、それを中核として威信構造が存在することを指摘している。さらにハイルブローナー (Heilbroner) = ミルバーク (Milberg) は、経済学研究者の中で、王位を追われたケインズ主義に取って代わる支配的な合意が存在しない一因として、経済学専門集団の硬直的ヒエラルキーの存在を指摘している。「重要なことを付け加えておくが、これらの代替的アプローチのいくつかが新しい古典的状況を構成するのに必要な支配権を握るのに失敗したのは、一部は、経済学専門家集団の硬直的でヒエラルキー的な組織のためである。」([15] p. 100 訳書 p. 141) このような特に精神的な硬直的ヒエラルキーは、他者の生の支配がおこなわれているさまを如実に現している。

- (6) ニーチェは、「認識は権力の道具としてはたらく。だから、認識が権力の増大につれて生長することは、明白である……。」([9] <480> (下) p. 22) と述べる。ニーチェのこの言については、二つの注釈が必要であろう。その一つは、認識と権力（「権力への意志」ではない）の関係は、実は、ニーチェの言（「認識が権力の増大につれて生長する」）とは逆であり、認識（＝「権力の道具」）の生長によってこそ権力（＝「道具の使用者つまり生の意志の力」）が増大するのである。「認識が権力の道具である」ということは、そのような意味なのである。しかしながら、その二は、認識のすべてが権力の道具ではない。認識の集合体としての概念体のなかでも権力への意志を有しているのは形而上概念なのである。他の概念（論理概念・経験概念）は、直接的にあるいは必然的に権力と結びついているわけではない。ただ、形而上概念の支配下のもとにあるときのみ権力への意志が吹き込まれるのである。
- (7) 「生の肯定」ということが主張されるのは、ニーチェが試みた諸価値に対する価値の問題、つまり諸価値を前提にして価値が何であるかを探求するのではなく価値そのものの価値を問う、という価値自体に問いかける問題への解答としてである。「生の肯定」は価値を規定する価値の判断基準であり、その規準は、ニーチェ的な表現をすれば、「生の退化の兆候であるか、生の充実の現れであるか」ということである。そしてこれ（「生の退化か・充実か」）がこの意義の世界の評価基準としての「意義規準」なのである。
- (8) ニーチェは、次のように述べる。『『認識』の意味。すなわち、ここでは、『善』や『美』にあってと同じく、概念は、厳密に狭義に人間中心的に、また生物学的に解されなければならない。或る特定種がおのれを保存しその権力を増大させるためには、それはその実在性の構想のうちにきわめて多くの算定しうる不易のものをとらえていなければならないがゆえに、これにもとづいておのれのとる態度の範型が構成されうるのである。自己保存の有用性一欺瞞されないためのなんらかの抽象的・理論

的な欲求ではなく一が、動機として認識機関の発達の背後にある(略)、認識機関は、その観察が私たちの自己保存を満足せしめるよう発達する。言葉をかえて言えば、認識意欲の度合いはその種の権力への意志の成長の度合いに依存している。種は、実存性を支配するため、それを奉仕せしめるため、それだけ多くの実存性をとらえているのである。」([9] <480> (下) p.22) なおニーチェは、ここでは種(そしてそのなかの人間)は、生的衝動としての自己保存のために認識を求めると考えているように思われる。

- (9) カント (I. Kant) の「実践理性」は、その最も典型的な事例である。あるいは経済学からその好例を引けば、マルクス (K. Marx) の「抽象の人間労働」や新古典派の「合理的経済人」がある。

- (10) 塚本によれば、「ディルタイ以後の新しい解釈学的展開に注目してみると、とくにハイデガー、ガダマーそしてハーバマスがあきらかにした重要なテーゼのひとつは、『関心』(認識関心)が『認識』にさき立つということ、すなわち認識・理解の『先行一構造』ということである。」([4] p.27) こうした立場に敢然と対立するのは「たとえばポパーが説く『事実と決断の二元論』である。認識活動と価値評価の徹底的分断を主張するこの立場は、『関心』が『認識』に先行することをむしろ否定する。つまり『認識』は『関心』に左右されない純粋なものであるべきだということである。これは合理主義の当然の説であり、一種の理想主義的客観主義と言ってよい。」([4] p.28) しかしながら「認識主体は、現にある世界を超越した〈アルキメデスの点〉ではないのであって、つねに世界において、歴史(伝統)において、社会において、状況においてはじめて成立すべきことをまず自覚しなければならないということである。」([4] p.28) 本論文もそのような立場に立つ。

- (11) 「事象」とは、研究対象として取り扱われるものすべてを含む。

- (12) シュムペーター (J. Schumpeter) は、分析活動に先立つ認識行動としてヴィジョン (vision) の存在を認める。すなわち、「分析的努力に当然先行するものとして、分析的努力に原材料を供給する分析以前の認知活動がなければならぬ。本書においてはこの分析以前の認知活動をヴィジョン (Vision) と名づける。」([19] p.41 訳書 p.79) つづいて、ケインズ (J. M. Keynes) をその例証として引き、「イギリスの一知識人の立場から捉えられた・老境に入ったイギリスの資本主義の特徴」が、「まさにわれわれの意味における考えられないヴィジョンに外ならないこと、およびケーンズその他が後にその上に積み重ねた一切の分析的努力に先きだっている(略)。」([19] p.42 訳書 pp.80-81) と述べる。但し、公平さを期すためにも次のシュムペーターの引用を引いておこう。「私はこの哲学的衣装が経済学の場合においても取去られるものであると考える。すなわち経済分析は、経済学者の政治的態度によってしばしば汚されたことはあったが、彼らがたまたま持っていた哲学的見解によって、恰好をつけられたことはいかなる時にもなかったのである。(略) たたとえばロック、ヒューム、ケネー、なかならずマルクスのごとく、はなはだ明確な哲学的見解をいっていた経済学者でさえも、事実問題としては、その分析の仕事をなしつつあった際にはこの哲学的見解によって毫も影響されなかった(略)。言葉の専門的意義における哲学なるものが、その構成上経済分析に対しては影響を与えなく且つ実際上にも与えなかった、となす私のテーゼ」([19] pp.31-32 訳書 pp.58-60) とシュムペーターは述べるが、これには二つの注釈が必要である。まず第一に、シュムペーターは、経済分析に対する「哲学」的見解の影響を否定するが、分析以前の認識としてヴィジョンの存在は認める。この差は「哲学をして認識論、すなわち知識の一般理論とほとんど同義」([19] p.30 訳書 p.55) という意味での「哲学」ではなく、「究極の真理(諸実在、諸原因)、究極の目的(もしくは価値)、究極の規範に関する・あらゆる神学のおよび非神学的な信仰の体系(「思弁の体系」)」([19] p.30 訳書 p.56) としての「哲学」の影響についてであること。第二に、その出自はどうであれ、最終的には、経済分析は「分析の道具箱」として精製されたものであると考えるシュムペーターの道具主義観による。

- (13) 「文化的意義」は、さまざまな要因によって形成されるが、とくに経済的な「文化意義」に限れば、その要因のうちでもっとも強力な要因は生産力の水準である。これについては、注(27)を参照。

- (14) 本論文における「文化」とは、伝統的な特定の学問分野を指示していない。つまり「文化」は、物



理的な対象をその学問分野とする「自然科学」と区分けされた、精神的な対象を学問分野とする「精神科学」を指示するのではなく、それらすべてを含み込むものとして定義されている。たとえ「客観的な事物の存在」の認識が認識目標とされたいわゆる「自然科学」的態度であってもそれもやはり「文化」なのである。学問領域における「文化」についての伝統的な区分けは、リッケルト (H. Rickert) によって提唱された。つまり「文化なる概念は宗教学・法律学・史学・文献学・国民経済学等々の一切の客体、つまり心理学を除く一切の『精神科学』の対象を包含するものであること、従って文化科学なる表現は非自然科学的特殊諸学科に対して寔に適切な呼称であることが判然する。」([14] p. 54) またヴェーバー (M. Weber) はリッケルトたち西南カント学派の伝統のなかで「文化科学」をより鮮明に定義づけた。「われわれは、生活現象をその文化意義において認識しようとする学科を、『文化科学』と名付けた。ある文化現象の形成の意義、およびこの意義の根拠は、法則概念の体系がいかに完全となっても、そこから取り出したり、基礎づけたり、理解させたりすることはできない。というのは、そうしたその意義や根拠は、文化現象を価値理念に関係づけることを、前提としているからである。文化の概念は、ひとつの価値概念である。経験的実在は、われわれがそれを価値理念に関係づけるがゆえに、またそのかぎりでは、われわれにとって『文化』であり、文化とは、実在のうち、価値理念への関係づけによってわれわれに意義あるものとなる、その構成部分を、しかもそのみを、包摂するのである。そのつど考察される個性的実在のほんのわずかな部分が、そうした価値理念に規定されたわれわれの関心によって色彩づけられ、そのみが、われわれにとって意義をもつ。それが意義をもつというのは、そのわずかな部分が、価値理念との結合によって、われわれにとって重要となる関係を提示するからである。それゆえに、またそのかぎりにおいて、その部分が、その個性的特性において、われわれにとって知るに値するものとなるのである。」([12] pp. 82-83) このように、リッケルトやヴェーバーは、「自然法則科学」に対して「文化科学」を定立し、自然科学における「法則」の代置として「文化科学」に「価値理念」を据えたのである。しかしながら自然科学にしても他の研究分野にしても認識論における認識の構造としては、認識対象によって認識の方法が異なるわけではない。認識が概念体によって遂行される以上はその構造は同質である。つまり自然科学であっても認識が概念体によってなされる以上は、その概念体は形而上概念である文化を基層にしている。この点が本論文の立場と「文化科学」提唱者達と基本的に異なる点である。

なお、リッケルトは「概念構成の原理」という用語を用いて、「現実が科学の中へ依って以て取入れられる概念構成の中に、科学の方法にとって決定的な形式的性格は宿っている筈であるから、或る科学の方法を理解するためには、我々はその科学の概念構成の原理を識る必要がある。(略) 概念構成とは常に要素の組立てといふ意味に解さるべきで」([14] p. 77) あると述べる。リッケルトはこうして「概念構成の原理」の相違によって「文化科学」と「自然科学」のそれぞれ独自の学問分野の定立を論証しようとした。本論文の「概念体の構造」という試みもまさしく「概念構成の原理」を提示しようとしたものであるが、その方向は、方法的二元論を主張するリッケルトとはまったく異なる。また現代の経済学者のなかでも、方法的二元論を主張するマッハルプ (F. Machlup) によれば、「したがって、社会科学が、人間の頭脳の中で起こる諸過程の言語的表現を対象とすることは、自然科学に対する優位を主張する根拠となるものではない。多くの場合、ものいう人間を相手にしなければならないことは、社会科学にとってむしろハンディキャップになるであろう。重要なことは、このような対象を扱う以上、社会科学は主観的解釈を用いざるをえないということである。よい悪いは別として、この点で自然科学と社会科学の方法とが違ふことを理解しなければならない。」([13] pp. 194-195) マッハルプのこの言は研究対象を取り扱うさいの注意として述べられたものであろうが、程度の差はあれ自然科学においてもいくつかの（とくに基本的な）対象については「主観的な解釈をもちいざるをえない」のである。例えばマッハルプ自身の言葉をかりれば、「自然科学の対象である物質が、ある日突然、自己の体験について語りはじめたならばどうなるかを想定してみるようにすすめたことがある。(略) 多くの場合、彼らの体験談は新しい理解よりは新しい混乱をつくり出すであろう。」([13] p. 193)

本論文の立場は、認識一般として「概念構成の原理」を提示するもので、学問分野の基本的な相違を浮き彫りにするものではない。むしろ学問分野の分類は、概念体を構成する三種の概念層のどの部分を強調するかという色彩の差であって、本論文は、概念体の構造はすべて同質であるという主張を含んでいる。

- (15) そのケース・スタディは、シュムペーターの名著『経済分析の歴史』のなかで随所にみられる。例えばそのうちのひとつをあげれば、シュムペーターはスミス (A. Smith) について次のように述べる。「われわれはすでにアダム・スミスの分析の大綱がスコラ学派と自然法哲学者からきたものであることを知っている。(略) しかし彼が実際にその先覚者から、学びとったこと、もしくは学びとりえなかったことが何であるにせよ、『国富論』が1776年において完全に斬新であったような・ただの一個の分析的な観念、原理もしくは方法をも含んでいないことは事実である。」([19] pp. 182-184 訳書 pp. 380-382) このように述べたシュムペーターの意図は、スミスの『国富論』における着想は、(当時の社会的通念としてはいまだ成熟していなかったとしても) 少なくとも当時の知識層ではすでに文化として定着していたものであったということなのであろう。
- (16) ハイルボローナー=ミルバークは、次のように述べる。「マーシャルやケインズについては言うまでもなく、スミスやミルにおける矛盾や欠陥について考えてみればわかるように、分析上の諸困難が古典的状况 [(分析以前の) ビジョンについて支配的に合意が成立している状態でクーンの「通常科学」状况の段階に相当する: 引用者注] にとって克服しがたい問題を提起するのではない。結局のところ決定的に重要と思われるのは、コンセンサスを得ようとするモデルが、その時代の社会政治的な諸価値や歴史的な展望を体现するその能力である。(略) われわれが一度ならず言及してきたように、ケインズ学説が描く経済状態は、不安定性がつねに潜在していてしばしば顕在化するものであって、それに対しては強力な政府介入以外に救済策はないというものである。これは、ケインズ学説が形成され経済政策を導く原理となった時代のエートスにきわめて密接に対応している。」[傍点は、引用者による] ([15] p. 72 訳書 pp. 102-3)
- (17) ハイルボローナー=ミルバークによれば、「社会的であると同時に自然的でもある『世界』は、そのような投影によって (thereby)、姿態と意味を受け取るが、現実を社会的に構成する (the social construction of reality) のはなんら不当なことではなく、世界を心理的のみならず倫理的にも住むに適したものにするために必要かつ正当なことでさえある。」[傍点は、引用者による] ([15] p. 76 訳書 p. 107) 原書でも不明瞭ではあるが、この文脈で「そのような投影」が「概念的な構成」を意味するならば、まさしく本論文が主張するところである。
- (18) ヴェーバーによれば、「ところが、いかなる意味で、また、いかなる関係においても、そうである [生活の現実がわれわれにたいして意義をもつ] かは、どんな法則によっても、われわれに明らかにされない。というのも、それは、価値理念によって決定されるからであり、われわれは、個々のばあい、そのつど、この価値理念のもとに『文化』を考察するのである。」([12] p. 92) むしろ法則は、認識の手段 (道具) なのである。「社会的諸法則の認識は、社会的実在の認識ではなく、むしろこの [社会的実在の認識という] 目的のもとに、われわれの思考が用いるさまざまな補助手段のうちのひとつにすぎない (略)。」([12] p. 92) 要するに、ヴェーバーの考えでは、「社会的」諸法則は、認識の結果でなく、「文化」を認識するための手段なのである。このヴェーバーの主張は、「文化科学」の分野について述べたものであり、「自然科学」についてはその限りではないが、「自然科学」における諸法則も、研究者がその研究以前に抱いていた先入見 (ヴィジョン) である本質的認識を認識するための手段として提示されているものなのである。例えばガリレイやニュートンの探究の本質的認識は、神の創造にかかるところの自然は無秩序であるはずはないという確信であった。
- (19) ハイルボローナー=ミルバークは、次のように述べる。「しかしビジョンは、問題となる見方そのものの範囲や深さや社会的意義を確定するというきわめて重要な前提条件を果たし続けるだろう。これは論理的な基準が存在しない仕事である。むしろ、存在するのは、多少なりとも明快な概念と多少なりとも説得力のある解釈だけであって、それらの説得力と明快さは観察者それぞれの好みに応じて異

なるという意味で、ことごとく曖昧にされている。このような心もとない(frail)材料によって、この世界を動かす鉄の決定 (the iron determination) が行われるのである。」([15] p. 59 訳書 pp. 82-83) 私は、「観察者それぞれの好み」こそがそれぞれの観察者が置かれている (文化一般ではなく) 文化状況と考えている。そして文化というものはいつも「心もとない」ものでありながら、「鉄の決定」をなすのである。そのケース・スタディは、シュムペーターの『経済分析の歴史』の随所にみられる。

- (20) 既述したとおり、特にドイツ西南学派たちは「自然科学」に対して文化理念を分析の主たる対象とする「文化科学」の定立を試みた。
- (21) 人間はなぜ知識 (認識) を得ようとするのかは、永遠の謎である。例えばアリストテレスは、人間が知識を得ようとするのは生得的本性だと考えており、その著『形而上学 (自然的なもののどものつぎのもののども)』は「すべての人間は、生まれつき、知ることを欲する。」([1] (上) p. 21) という言葉から始まる。そして知識のなかに、「快楽を目指してのものでもないがしかし生活の必要のためのものでもないところの認識 [すなわち諸学] <sup>エピステーマイ</sup> が見いだされ、そのような「知恵と名づけられるものは第一の原因や原理を対象とするものである」というのがすべての人々の考えているところである」([1] (上) p. 25) と考えていた。その対極としてニーチェは、知識は、偶発的発生のなかで、人間の個体保存のための偽装手段として用いられてきたという。「個体の維持の手段としての知性は、その主要な力を、偽装ということにおいて、展開してゆく。何故なら、偽装こそ、より弱体で遅さにおいて劣る個体どもが、よって以て自己を維持する手段にほかならぬからである。このような個体どもには、角あるいは肉食獣のもつ鋭い歯などによって生存競争を行なうことは、拒まれているからである。こうした偽装術は、人間においてその絶頂に達しているのである。」([6] p. 297) (なお、ここでも、知識は「個体維持」という目的の手段である、と考えられている。) このようなニーチェの言をフィंक (E. Fink) は次のように解する。「ニーチェは、人間の認識の機能を実用主義的に解釈する。知性は生命意志に奉仕する。生の維持に役立つ幻想こそ知性の基礎である。認識する動物の思い上がり、生存へとこの動物を説得し、誘惑するのである。知性の最も普遍的な本質は、生の戦いを緩和する偽装であり、狡猾な賢さである。そしてこの傾向は人間においてその最高潮に達する。偽装術がその頂点に達するのである。」([10] p. 49) 人間が知識をなぜに求めるかについての回答は、解釈的なるゆえにまさに千差万別であろう。本論文は、「生の意志」が知識を得ようとするさいの原体験は、自己保存の衝動を保持しつつ、意味 (意義) を欲しているという解釈的立場に立つ。
- (22) ヴェーバーによれば、(文化科学についてであるが)「そういうわけで、われわれの意味における文化科学的認識は、实在の構成部分のうち、われわれが文化意義を付与する事象と一いかに間接にであれ一なんらかの関係をもつ部分だけを取り上げるかぎり、『主観的』な前提と結びつけられている。」([12] p. 96) そしてヴェーバーは、『主観的』な前提」という価値規準は、「価値への自由」という枠内では、研究行為における価値規準を読者と自分自身とに鋭く意識させるという点で有用でさえあると説く。その理由は、「この究極の価値規準が、主体的自己制御のもとで〈知るに値する (wissenswert)〉事実を選択する究極の規準、つまり〈価値理念〉としてはたらしき、問題設定—〈理念型〉構成—〈因果帰属〉の方向と範囲とを限定して、研究を自覚的に導くからであろう。」([12] 訳書 pp. 208-209:「解説」より) からである。なお、ヴェーバーのこの叙述の真意は、「研究行為における価値観の自覚」ということであるが、その叙述の一部は私が提唱する三つの世界の相互関係の一部を物語っている。つまり、意義の世界の形而上概念が経験の世界のなかから研究対象を拾い出し (「問題設定」)、それが論理の世界で彫琢された (「〈理念型〉の構成」) 後、経験の世界での事象を説明 (「〈因果帰属〉の方向と範囲を事象に当て嵌める」) することになるからである。
- (23) ハイルボローナー=ミルバークは、現代の経済学の状態について「ヴィジョン」が欠如していることを嘆く文脈で、「それ [分析以前の認識行為: 引用者注] が、ビジョンによって支えられる分析的構造物の様式と枠組とを形づくるのである。」([15] p. 10 訳書 p. 16) と述べる。そして「ここでは、分析上の問題を概念上の問題から分離するのが、そして前者の作用がいかに劇的なものであろうと、

お膳立てをするのは後者のほうだというわれわれの主張をおし出すのが有効である。」([15] p. 32 訳書 p. 46) 本論文の用語法を用いれば、「分析上の問題」は、論理概念の問題に相当し、「概念上の問題」は、形而上概念の問題に相当する。

- (24) ハイルボローナー=ミルバークによれば、「このように意見の対立においては、いずれの判断が適切かどうかを決定するための客観的基礎となるものはないように思われる。成功か失敗かは、客観的基準の中にというよりもむしろ、見る者の目の中にある。経済学者たちは、論理や経験的証拠に厳密な基礎を置くのではない、別の議論にたよっている。ビジョンの考察が決定的に重要となるのは、経済理論が関心を向ける問題の解決に際してではなく、理論それ自体の評価基準が何であるのかの決定に際してである。」([15] p. 56 訳書 pp. 78-79) 彼らがここで述べた「理論」が一組の概念体を指示しており、しかもその「理論」の意義が問われているのであれば(注(26)を見よ)、まさしくこの「評価基準」こそが、意義の世界の「意義規準」なのである。しかしながら理論の評価についてはそれ以外の規準も存在するのである。評価の対象が、もしも純粋に論理的な理論であれば、あるいはそうでなくても一組の概念体の論理的な面のみを評価するとすれば、それは論理的な規準(「トートロジー規準」)によって評価されるであろうし、また純粋に経験的な調査であれば、あるいはそうでなくても一組の概念体の経験的な面のみを評価するとすればそれは経験的な規準(「実用規準」)によって評価されるであろう。

- (25) 論理概念の「客観性」は、トートロジーの貫徹であり、経験概念の「客観性」は、感覚所与の報告である。

- (26) ハイルボローナー=ミルバークは、その著で彼らの論述を展開するさいの最も重要なキ・ワードとして「古典的状况」という概念を持ち出すが、それに関連して次のように述べる。「もはや明かなはずであるが、古典的状况が重要なのは、用いられている論理的構成においてそれが客観的真理や卓越した正確さや有用性をもっていると主張しうるからではなく、『科学的』根拠によって擁護するのがきわめて困難かもしれないいくつかの理由によって、それが普遍的同意ともいべきものを得ているからである。」([15] p. 15 訳書 p. 22) 本論文は、そのような普遍的同意を得ている概念を形而上概念と呼んでいるのである。続けて、ハイルボローナー=ミルバークは、次のように述べる。「古典的状况とは、不協和で支離滅裂な社会観察の混乱状態を整理し、政治的想像力に平穏と落ち着きを取り戻させる定式化のようなものと見ることができる。つまり、このような状況は心理的安息の諸契機を描くのであって、その支配は分析的(あるいは経験的)考察によって厳しい試練に晒されるかもしれない。しかしそれがヘゲモニーを有するのは相当程度、価値観のしみ込んだ考察に基礎をおいているからである。」([15] p. 17 訳書 p. 24) とここで彼らが、ここで「その支配は分析的(あるいは経験的)考察によって厳しい試練に晒されるかもしれない。」とささやかに注意したことは、後ほど明らかにするが(これについての予告は、[2] で述べた)、非常に重要な指摘である。つまり概念の相互作用において、形而上概念は、論理概念や経験概念からのチェックを受けるのである。

- (27) 本テーマは「経済哲学のための構想」であるため、社会における経済思想の構造を直接分析するものではないが、経済思想と学的思想(学的「確信」)の関係を手短かに述べれば、次のような図式を大まかに考案している。もちろん、本論文における私の立場からしても、この図式が事実のありのままの姿であるなどと主張しているのではない。この図式も先入見(換言すればヴィジョン)として試論的な概念体の一種にほかならないのである。

経済学研究における学的「確信」(形而上概念)は、下部構造としての経済的要因つまり生産力のランプの上で、社会における経済的文化(経済思想)を濾過したものである。それを図式化すれば、次のようになる。

図式：

生産力水準→経済的文化(経済思想)の形成→経済的世界観の出現→経済学的共同体の合意(学的「確信」)の形成→学的「確信」の論理的並びに経験的な整備→経済的・社会的諸制度の樹立→生産力水準→…



この図式全体が、動態的で段階的なものであり、各項は、次項に対しては育成的・支配的であるが、次第にそれ自身の生長に伴い、既存の前項に対して対立的な様相を帯びてくる。例えば、前項の「経済的・社会的諸制度」は、次項の生産力にとって最初は育成的・支配的であるが、生産力の生長に伴い次第に桎梏的なものと化す。そこで前項と次項との間で緊張関係が生じるが、結局は、次項の生長が優勢となる。こうしてこの図式全体は弁証法的でありかつ進化論的ではあるが、それが進歩的であるかどうかについてはまた別の議論を必要とする。なぜならば、「進歩」の規準は、「生産力の増大」だけではないからである。ただ、「生産力の増大」は、「生」のレベルで「進歩」について最も合意を得やすい規準のひとつである。

- (28) 意義の世界では、「生の意志」が経験概念という素材に価値という酵母を加えて形而上概念を醸成するのであるが、まだ完全に蒸留されていないものが先入見に相当する。塚本によれば、「森羅万象の無意味な広大無辺の広がり」のなかで、人間という意識的生命存在は、それでもなおなにごとかの意味を求めずには生きられない『ひとくきの葦』にして『考える葦』なのだ。」([4] p. 200) また彼は、「人間は、〈意味を求める存在者〉であり、世界をさまざまに意味づけるというしかたで世界と関っている。そのかぎりでは人間は、なんらかの『理解』を本質契機とする生命存在であり、日常的になんらかの意味連関として解釈された世界に生きているわけである。」([4] p. 202) と述べる。こうして研究者にとっての、研究活動における「日常的な意味連関」は、先入見として彼の研究営為に先行しているのである。
- (29) ヴェーバーは、理解社会学への途を切り開いたさいに次のように述べた。『『目的』とは、われわれの考察にとっては、ある行為の原因となる、ある結果の表象である。ある有意義な結果に寄与する、あるいは寄与しうるあらゆる原因とともに、われわれは、この〔目的として表象される行為〕原因をも考慮する。そして、そうした原因の特殊な意義は、もっぱら、われわれが人間の行為を、たんに〔外側から観察して〕確認するばかりでなく、〔行為者自身によって主観的に抱かれた意味を〕理解することができ、また理解しようと欲する、という事情にもとづいている。』([12] p. 98) このヴェーバーの主張は、文化科学が自然科学と同等に「科学」として存在しうるための方法を述べたものであるが、研究営為一般にも妥当し、概念体でそれに相当する層が意義の世界である。
- (30) ニーチェは、次のように述べる。『こうした分析をおこなう際に人間の知性は、自分自身を自分の遠近法的形式のもとに見るほかに、しかもその形式の内でのみ見るほかはないからである。われわれは自分の存在する片隅の周囲を見ることができない。そのほかにもどんな別種の知性や遠近法がありうるかを知らんとするなどは、徒な好奇心でしかない。』([7] 〈374〉 p. 376)
- (31) ニーチェは、その「遠近法的なもの」が「あらゆる生の根本条件」であるという。すなわち彼は、『あらゆる生の根本条件である遠近法的なもの……』([8] p. 12) と述べる。本論文は、この「遠近法」が生意志に根ざしている、という立場に立つ。
- (32) カントによれば、「しかし、かかる種類の認識〔形而上学：引用者注〕も、或る意味では与えられていると見なすことができる。形而上学は、学としてではなくても、人間の自然的素質 (metaphysica naturalis) としては実際にも存在するのである。人間の理性は、博学多識を誇るというような虚栄心に動かされなくても、自分自身の止みがたい要求に駆られて、理性の経験的使用やまたそれから得られた原理などによってはとうてい答えられないような問題に向って、絶えず進んでいくものだからである。それだから人間の理性が発達して思弁を事とするようになるや否や、なんらかの形而上学があらゆる人間の心のうちにこれまでも常に存在していたし、またこれからも先きやはり存在するであろう。」([3] (上) pp. 75-76)
- (33) ハイム・ボローナー＝ミルバークは、次のように述べる。「形式的な分析が理論の全体的な構成—もちろん細部の計画ではなく—において果たす相対的に小さい役割は、分析の出発点である仮定から結果を演繹する場合にも、あるいは分析が始まる最初の状況を設定する与件の定義を検討する場合にも、それが果たす役割が疑問の余地なき性質のものであることを示している。」([15] p. 125 訳書 pp. 176-177) また、「経済理論の伝統的な構成では、分析はビジョンが終わるところから始まるのであって、



ビジョンが提示するものを受け入れ、法則めいた行動という強力な前提を、後続する因果連鎖の決定に適用することによってあらゆる追加的な変数や変数群の効果を推論してきた。」〔15〕 p. 125 訳書 p. 177) これらは、論理概念の役割である。

- (34) シュムペーターは、「われわれの情<sup>モーション</sup>緒に対してある種の一方的な仕方では影響を与えないで、従って、またすべての人に〈同じような理解を〉要請する多数の現象が存在するという事実がこれである。加えて、われわれが分析の仕事に応用する研究手筈のルールというものも、ほとんどイデオロギーの影響から免れているのであって、それはヴィジョンがこれに服する〈のとは正に逆である〉ことをわれわれは知っている。」〔19〕 p. 43 訳書 p. 83) と述べるが、むしろ『経済分析の歴史』は、イデオロギーの様相を生来的に纏っているヴィジョンが、分析の道具としてイデオロギーの様相を取り除いていく過程が展開されているのである。それは、ヴィジョンが「現象」と「研究手筈のルール」によってそのイデオロギー的衣装を脱ぎ捨てて経済分析の道具箱に納められていく過程なのである。本論文の用語法を用いれば、前者の「現象」は、経験概念であり、後者の「研究手筈のルール」は、論理概念に相当する。そして概念間の相互作用を取り扱うさいに述べることになるが、形而上概念に相当する「ヴィジョン」は、「現象」としての経験概念と「研究手筈のルール」である論理概念からのチェックを受けることになるのである。こうして『経済分析の歴史』は、ワルラス (L. Walras) の一般均衡を理想型として、経済分析の道具箱が形成される過程が展開されたものであるといっても過言ではなかろう。そしてその過程とは、まさに形而上概念と論理概念と経験概念が織り成す壮大なドラマなのである。〔19〕
- (35) 経済学の分野では、いつもこのような状況は生じていたし、あるいはそのような多様性こそが必要であると主張されることさえある。なお、本論文では、文脈上必要でないかぎり、直接、「経済学」については触れていないが、その理由は、本論文は経済哲学の認識論的基礎を構築することが目的であるからである。そのため認識論一般を論じるような体裁をとってはいるが、私の思考の背景には経済学の世界が広がっている。
- (36) この「同一の」という言葉を用いることについては慎重さを必要とする。というのも、概念体の中核となっている形而上概念が異なれば研究対象（より正確には研究目標）も、究極的には微妙に異なっているからである。例えば、ケインジアンにとっては「非自発的失業」は最重要な研究対象のひとつであるが、マネタリストにとっては「非自発的失業」は存在しない。そのため、「研究対象」という言葉の代わりにほぼ近似している研究対象という意味で「研究領域」という言葉を用いた。
- (37) レーヨンフーフド (A. Leijonhufvud) は、経済学の世界でのこうした有様（「エコノ族の生態」）を戯画的に描いている。〔17〕
- (38) 経済学の分野においてこのような状態を描写した典型的な事例としては、次の文献を見よ。〔18〕そこでリーダー (M. Reder) は、シカゴ経済学を取り上げており、そのシカゴ見解（“Chicago View”）の本質は、“Tight Prior Equilibrium”であるとする（〔18〕 p. 13）。この概念には、なんらの権力の介入をも許さず合理的な個人の決定を標榜するという生の意志が反映した形而上的色彩がみられる。
- (39) ここで「紐帯概念」という用語を持ち出すことは混乱を招く虞があるため躊躇を覚えるが、これは「形而上概念」・「論理概念」・「経験概念」といった分類法に従ったものではなく、むしろ「真理」が「教導概念」であるといったとき（〔2〕 p. 30）の分類法に従う。つまりそれは、その概念がもつ特性のひとつを単に強調したにすぎない。そして紐帯概念の特性とは、シュムペーターの言を借用すれば次のようなものである。「グループのメンバーの間には、一定量の団結力がなくてはならぬのは明らかである。ことに少なくともこのグループが十分に確定的な存在となるに至った暁には、そのメンバーが相互を認知し合い、ある種の人は受け容れるが他はこれを排除する拠りどころとなるような・明示的または半ば意識的なルールを生む団結的精神がなくてはならぬ。」〔19〕 p. 45 訳書 p. 87)
- (40) この共同体の紐帯概念は、近年の科学哲学の用語を用いれば、クーン (T. Kuhn) のパラダイム (Pradigm) でありまたラカトス (I. Lakatos) のハード・コア (Hard Core) に相当する。本論文

の「形而上概念」や「紐帯概念」は、こうしたクーンやラカトスの概念に非常に近い意味を主張しているにもかかわらず彼らの用語を用いない理由は、彼らの用語が形而上的な性質を包含しているにもかかわらずそのことを明言しないからである。

- (41) デルタイは、「哲学は、世界の内に於いてではなく、人間の内に認識の内的連関をもとめねばならない。人々が生ってきた生—それを理解することが今日の人間の志望である。」([5] p. 11-12)と述べるが、しかしながらその形成過程は明らかではないとして、それを歴史の類型的把握に求める。「吾々は生から形而上学的体系の分化を生ぜしめるところの形成法則を知らない。世界観の諸類型の把握に歩を進めんとすれば歴史に向はなければならぬ。其の際吾々が歴史から学ばなければならない重要な事柄は、生と形而上学との連関を把握し、これら体系の中心たる生の内に沈潜し、歴史を貫流する大なる体系連関—その内に類型的態度が存続する—を意識することである。」([5] p. 4) こうしてデルタイは、(必ずしも研究者共同体を直接に対象にしているわけではないが) 歴史的に生じた世界観についてのいくつかの類型を摘出するが、それらの類型は、それぞれのグループを紐帯する形而上概念にほかならないのである。
- (42) パーソンズ (T. Parsons) によれば、社会的相互行為に道徳的問題が関与しているかどうかは、一般的な意味での共通価値の存在によっては決定されないのであって、『道徳的問題が存するのは、相互行為体系の「保全」[“integrity”] ないし「連帯」[“solidarity”] の保持がそれ自身価値であるとき、その諸選択肢がその保全ないし連帯とかならず関連しているとみなされるばあいに限られる。』([11] p. 106)
- (追記) パレート (V. Pareto) は、集合体の維持・保存に向かう本能あるいは心性として「集合体維持の残基 (persistence des agrégats)」を摘出した。[20] このパレートの指摘は、認識論的にも妥当する。

#### 引用文献

- [1] アリストテレス『形而上学』出 隆訳 岩波書店、(上) 1959 年 (下) 1961 年
- [2] 浦上博達「概念体の構造—経済哲学のための構想—」(『城西大学 大学院研究年報』第 18 号 城西大学 2002 年)
- [3] カント (Immanuel Kant)『純粋理性批判』篠田英雄訳 岩波書店、(上) 1961 年 (中) 1961 年 (下) 1962 年
- [4] 塚本正明『現代の解釈学的哲学—デルタイおよびそれ以後の新展開』世界思想社、1995 年
- [5] デルタイ (Wilhelm Dilthey)『世界観の研究』山本英一訳 岩波書店、昭和 10 年
- [6] ニーチェ (Friedrich Nietzsche)「道徳外の意味における真理と虚偽について」渡辺二郎訳 (ニーチェ全集 第 3 巻『哲学者の書』)理想社、昭和 40 年
- [7] ニーチェ (Friedrich Nietzsche)『悦ばしき知識』信太正三訳 (ニーチェ全集 第 8 巻)理想社、昭和 37 年
- [8] ニーチェ (Friedrich Nietzsche)『善悪の彼岸 道徳の系譜』信太正三訳 (ニーチェ全集 第 10 巻)理想社、昭和 42 年
- [9] ニーチェ (Friedrich Nietzsche)『権力への意志—すべての価値の価値転換の試み—』原 佑訳 (ニーチェ全集 第 11・12 巻)理想社、(上) 昭和 37 年 (下) 昭和 37 年
- [10] フィンク (Eugen Fink)『ニーチェの哲学』吉澤傳三郎訳 (ニーチェ全集 別巻)理想社、昭和 38 年
- [11] パーソンズ (Talcott Parsons)『社会体系論』(現代社会学大系 第 14 巻)佐藤 勉訳 青木書店、1974 年
- [12] ヴェーバー (Max Weber)『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』富永祐治・立野保男訳 折原 浩補訳 岩波書店、1988 年
- [13] マッハルプ (Fritz Machlup) 著 マートン・ミラー編『現代経済学の展望』安場安吉訳編 日本経

済新聞社, 1971 年

- [14] リッケルト (Heinrich Rickert) 『文化科学と自然科学』佐竹哲雄・豊川 昇訳 岩波書店, 昭和 14 年
- [15] Heilbroner, Robert and Milberg, William, *The Crisis of Vision in Modern Economics Thought*, Cambridge UP., 1995 工藤英明訳『現代経済学 ビジョンの危機』岩波書店, 2003 年
- [16] Eichner, Alfred S., (ed.) *Why Economics is not yet a Science*, M. E. Sharpe, Inc., 1983 百々和監訳『なぜ経済学は科学でないのか』日本評論社, 1986 年
- [17] Leijonhufvud, Axel, "Life among the Econ," *Western Economic Journal*, Sept. 1973, pp. 327-337 武藤博道訳「エコノ族の生態」(『展望』筑摩書房, 昭和 49 年) [*Information and Coordination: Essays in Macroeconomic Theory*, Oxford UP., 1981 中山靖夫監訳『ケインズ経済学を超えて』東洋経済新報社, 昭和 59 年, 第 12 章に付された「編者の注」をも見よ, および郡嶋 孝・浦上博達編『現代のエスプリ: 経済学危機から明日へ』至文堂, 1991 年, に再録]
- [18] Reder, Melvin W., "Chicago Economics: Permanence and Change," *Economic Literature*, Vol. xx No. 1 1982, pp. 1-38
- [19] Schumpeter, Joseph A., *History of Economic Analysis*, (edited from manuscript by Elizabeth Boody Schumpeter) Oxford UP., 1954 東畑精一訳『経済分析の歴史 1』岩波書店, 1955 年
- [20] パレート (Vilfredo Pareto) 『社会学大綱』(現代社会学大系 第 6 卷) 北川隆吉・廣田 明・板倉達文訳 青木書店, 1987 年